

## 「父親の不在」を文学は告げている？

『なずな』におけるイクメン

ア  
ラ  
ー  
ー  
レ  
テ  
リ  
ア  
ン  
ナ  
GUARINI Letizia

### はじめに

二〇一二年に「GQ Japan」に掲載された内田樹との対談において高橋源一郎は日本文学における「父の不在」について述べている。氏によると、昔は父親が家父長として娘を抑圧していたが、現在は母親がその役割を一手に担うようになった。そのため、昨今日本では「父親は出て行って、残された母と娘がじつとにらみ合っている」という物語が流行っている<sup>①</sup>。また、内田の指摘によると、家父長制の解体によって家庭内における母親の発言権と決定力が高まり、戦後の社会において娘たちが母親に対して「愛着と嫌悪」の感情を抱き、父親に対しては「無関心」という態度を取るようになったのである。このような社会の変化が文学に反映され、母親の強い支配力と、それに抗う娘の工夫の中にこそ現代日本文学において一番ホットな文学的素材が潜んでいること、父親が二次的な役割しか果たしていないことを内田が述べている<sup>②</sup>。

内田と高橋は二〇一二年の日本文学は「父の不在」を告げていると主張しているが、果たしてそうだろうか。二〇一一年に出版された「保育小説」<sup>③</sup>『なずな』では、堀江敏幸が体を壊して育てられなくなった弟の代わりに生後二ヶ月の子どもを育てる男性を描いた。この小説の主人公については、高橋は「疑似父」であり、「普通の父親の姿は見かけない」と述べている<sup>④</sup>。しかし、『なずな』では実の親でないにもかかわらず一人で子どもを育てる父親

を描くことにより日本社会の変化、かつ父親像の変化を表しているのではないだろうか。本稿では、『なすな』に焦点を絞りながら日本社会における「父性」の変化がどのように文学に反映されているかを探りたい。第一節では、父親論を遡り七〇年代から「イクメン現象」の登場までの日本社会における父性の変貌を整理する。第二節では、『なすな』において描かれている「父親」を分析し、本作品で提示されている「新たな父親像」について論じる。

### 一、現代日本社会における父親——「不在する父」から「育児する父」へ

千田有紀が述べているように、「家族」(family)も「家庭」(home)も、父親と母親、そして未婚の子どもからなる血のつながりのある集団を指し、非血縁員を排除し、血縁員によるプライベートな空間を意味している<sup>⑤</sup>。また、落合恵美子の指摘によると、「近代家族」とは、我々が「当たり前」の家族とと思っている家族のことをいう。氏の言葉を借りると、

お父さんは頼もしい一家の大黒柱、お母さんは家庭にあつて愛情をこめて家族の世話をする、二人か三人の可愛らしい子供がいて元気に学校に通っている、といったイメージと言おうか。<sup>⑥</sup>

このような家族においては、性別役割分業観によって父親と母親のそれぞれの機能がはっきりと分かれており、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方が根付いてきたのである。では、このような家庭像、または父親像はどのように変化してきたのだろうか。冬木春子<sup>⑦</sup>が指摘しているように、日本において父親論は一九七〇年代以降に盛んとなり、「父親の不在」という概念が一つの展開軸になっている。即ち、社会的背景によって「父親の不在」の有り様が異なると考えられる。氏が整理しているように、一九七〇年代の初頭まで続いた高度経済成長によってイエとしての「家族」の構造に変化が生じたことを背景に、「威厳的父親の不在」が問題視された。一九八〇

年代において「働き過ぎな日本人」に焦点が当てられ、男性労働者に課せられた長時間労働の所産としての「在宅時間の短さ」が問題となり、「父親の物理的不在」が問題視された。一九九〇年代においても「父親の物理的不在」の問題が指摘され続けたが、一方子どもの社会化の担い手として母親にできない役割を求める父親論も現れた。その代表的な書物は林道義のベストセラー『父性の復権』（一九九六年）である。林によると、父は「価値のシンボルとしての役割」を果たしており、「威厳のある存在でなければならぬ」のである<sup>⑧</sup>。冬木がこれを「ネオ威厳的父親不在論」と呼んでいる。

一方、石井クンツ昌子<sup>⑨</sup>が指摘しているように、一九九〇年代から日本における男性学研究が盛んになり、その発展が従来の大黒柱的な存在の父親に対して疑問が投げかけられるきっかけをつくった。また、保守的な考え方を表す『父性の復権』に反して、育時連（男も女も育児時間を！）<sup>⑩</sup>のメンバーが男性の育児参加の経験談を集めた『育児で会社を休むような男たち』（一九九五年）や『父さんは自転車にのって——男の育児時間ストてんまつ記』（一九九〇年）が出版された。これらの書物が父親役割に関する考え方の多様性を明らかに示したと石井クンツが主張している。

また、一九九〇年代に大きな政策転換があり、自治体による「父親の子育て支援」が展開されるようになった。石井クンツが整理しているように、一九六〇年代から一九七〇年代前半にかけて高度成長を背景に日本の合計特殊出生率は二・二三前後に安定し、出生数の増加とともに第二次ベビーブームと呼ばれた。しかし、一九七三年の第一次オイルショック以降出生率は減少し、一九八九年の「一・五七ショック」を経て二〇〇五年には過去最低の一・二六を記録したのである。氏によると、「一・五七ショック」を機に日本における少子化対策は本格化した。政府の子育て支援対策の出発点は一九九四年に文部・厚生・労働・建設省四大臣により策定された「今後の子育て支援の

ための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）にある。一九九九年の「新エンゼルプラン」、二〇〇一年の改正教育・介護法、二〇〇二年の「少子化対策プラスワン」、二〇〇四年の「子ども・子育て応援プラン」の策定を通じて新たな少子化対策が展開された。また、一九九二年に施行された「育児休業法」をもって初めて男性も育児休業を取得できるようになり、父親の育児や子育て参加を奨励することも少子化対策の一環として行われてきたと石井クンツが述べている<sup>⑪</sup>。冬木が主張しているように、これらの対策をもって、「母親だけが子育てをする」から「母親も父親も子育てする」、そして「地域で子育てを支援する」という行政側の育児観の転換が見られる<sup>⑫</sup>。

このように日本の「家族」における父親の役割が徐々に変更し、「イクメン現象」が現れたのである。石井クンツが指摘しているように、「育児を楽しめる格好いい男」を意味する「イクメン」（育メン）という言葉は某広告会社のコピーライターによって造られた語彙である。育児と仕事を両立させている男性社員が集まっていたこの会社は、二〇〇六年に体験談を発信するホームページ「イクメンクラブ」を開設し、それが育児雑誌や育児関連サイトなどに広まった。そして「イクメン」（育メン）が二〇一〇年の新語・流行語大賞のトップテンにも入った。この「イクメン・ブーム」は日本社会の父親役割への期待の変更を表しているといえよう。石井クンツの言葉を借りるなら、今や日本の男性たちに求められるのは従来の「仕事人間」よりも、家事や育児を優先する「家族人間」的なライフスタイルへと変化してきているのである<sup>⑬</sup>。

以上、本節で見たように七〇年代から今日にかけて日本における父親像は変化し、威厳的な親から楽しく育児をする親へとシフトしてきた。現代日本社会が期待している「新たな父親像」を念頭におきながら、次節では『なづな』における父性について論じる。

## 二、期間限定の父親——『なずな』におけるイクメン

堀江敏幸の長編小説『なずな』は、二〇〇八年九月から二〇一〇年九月まで「すばる」で掲載され、二〇一一年に集英社により出版された。主人公菱山は、独身四十男であり、架空の町の伊都川市で地方紙の記者として勤めている。菱山の弟がドイツの出張中で自動車事故に遭い、大怪我を負った上に現地の病院に入院することになった。また、義妹が出産一ヶ月後にウイルス性感染病にかかり、入院し子どもから手離れをせざるを得なかった。そのため、育児の経験がない菱山が生後二ヶ月の弟夫婦の子なずなを預かることになった。

本節では『なずな』において描かれている父親像をめぐって論じたいが、作品分析に入る前に「父親の育児」の定義について述べる必要がある。『父親の育児』に関する先行研究では、「育児」を「世話」「しつけ・教育」「子どもと一緒に遊ぶ」の三側面に分けて捉えることが多い<sup>⑧</sup>。また、戦後日本において父親をめぐる言説が二つあり、それぞれは「父親の育児」に対する社会的期待を反映している。一つ目は、一九六〇年代初期に登場し、一九七〇年代半ば以降広く流布し、徐々に形を変えながら今日まで至っている。この言説によると、父親と母親の資質に違いがあることを前提に、「しつけや教育」において、母親に果たせない役割を父親に求める。即ち、「しつけや教育」に必要とされる父親の威厳の源泉は、職業を通じた家族外の社会とのつながりに求められる。一方、二つ目の言説は、一九九〇年代前後から広く流布している。この説によると、母親と父親の資質の違いを前提とせず、乳幼児の「世話」を含めたより広い範囲で子どもへ関与する父親が期待されている。

では、『なずな』においてどのような「父親の育児」が見られるのだろうか。次の引用箇所から理解できるように、主人公の菱山は赤子の身のまわりの世話をする父親として描かれている。

珈琲を飲み終えたところで、隣の部屋のなずなが泣き出す。飲んでる最中でなかったことに感謝しつつ、べ

ツドにかけつけておむつに触れる。なまあたたかい。折りたたみのクッションを床に敷き、バスタオルをひろげ、抱きあげたなずなをそっと下ろして、おむつを替えてやる。小さな目を開け、口も開けて、顔を横向きにしているから満足してくれたのかと思つたら、パチンパチンとベビー服のホックをとめたたん、また激しく泣きはじめた。おながが空いているのだ。おむつを始末し、薬用ハンドソープで手をよく洗う。二度洗い、心配になつて三度洗い、タオルではなくティッシュで手を拭いて、それからミルクパンでお湯を沸かす。この子に安いアルミのやかんなんて使わなくてよかつたと思いつつ、粉ミルクと友栄さんが消毒してくれた哺乳瓶を用意して、沸騰した湯が四、五十度くらいになつたあたりで規定量の粉を規定量のお湯で溶かした。それを丁寧に揺らしてからボウルに入れた水で冷やす。頃合いを見て手の甲に一、二滴を垂らし、適温かどうかを見る。

『なずな』では子どもが生後二ヶ月のため、「しつけ・教育」や「遊び」の場面は見られないが、身のまわりの世話のシーンが多い。主人公の菱山はなずなのために食事、おむつの世話をするなりお風呂に入れるなり、「昼夜兼行の世話で（中略）疲れは抜けてくれない」のである。菱山はきちんと睡眠が取れず、しばしば目の下の隈が目立つと周りの人物から指摘されているほどなずなの世話を尽くしている。一方、次の引用箇所から理解できるように、『なずな』は育児・子育ての苦労のみならず、その楽しさも描いている。

なにからなにまで、お世話になりまして、と電話を切ろうとしたとき、なずなとふたたび目が合った。やっぱり、あれは笑みではないか？ 目尻が下がり、口もとが逆にあがっている。ホー、ホハ、と彼女は声を出した。ホーホケキョの抑揚で、ホー、ホハ。泣くときは、彼女が世界の重心になった。核からマントル、そして硬い地殻までも抜けて突きあげてくる泣き声は、極の磁力をも狂わせるほどだった。しかしこの表情はいったいなんだらう。地の底との関係を瞬時に断ち切って風船みたいにふわりとあがり、そのままはじける。部屋の

空気がいっぺんに弛緩し、なすなではなく、見ているこちらが小水を漏らしたかと思えるほど力が気持ちよく抜ける。これが笑みだとしたら、笑顔は、どうやらひとりだけのものではないらしい。なすなの笑みは、彼女自身の世界だけをなごませるのではなく、この私の世界をもゆるませる。

「イクメン」という言葉を作りだした団体、NPO法人「イクメンクラブ」のHPにある、「イクメンクラブ三カ条」には、「イクメンとは、育児を楽しめるカッコいい男」のことである」と記してある<sup>15)</sup>。また、父親団体の中でもっとも大きいと言われるNPO法人「ファザーリングジャパン」のHPには、「良い父親」ではなく、笑っている父親を増やす、それがファザーリングジャパンのミッションです」とある<sup>16)</sup>。このように、イクメンたちを支援する団体は、育児・子育てが楽しい側面ももっていることをしばしば主張している。『なすな』においては最初夫婦への義務感からなすなを預かっていた菱山は、彼女の一時的な父親になることよって、育児・子育ての喜びを知るようになり、なすなから離れる時期が近づくとつれて、以下のように考えるようになる。

なすなのおかげで世界がひろがりましたし、こちらにとつては、よいことのほうが多いです。（中略）肉体的な負担や精神的な重圧を除いても、得るもののほうが多いです。

上記のように菱山は育児を楽しめる父として登場する。しかし、『なすな』はイクメンの有り様を描くことに留まらず、「どのようにイクメンになるのか」という重要な問いにも注目している。石井クンツが指摘しているように、父親の育児・子育て参加の規定要因の一つはネットワークサポート要因である。その中で、従来の父親の育児・家事参加に関する研究ではあまり検討されていなかった職場環境と慣行に注目すべきだと氏が主張している。即ち、職場の育児休業制度の充実、夜間・深夜勤務の有無、始業・終業時刻の自由などが父親の育児参加に影響を与えるのであり、子育てを支援し、社員の自主性を重んじる職場ほど育児参加を促進するのである。では、『なすな』にお

いて職場環境がどのように設定されているのだろうか。次の引用箇所から菱山の職場・伊都川市の地方紙「伊都川日報」は父親の育児参加を促進していることが理解できよう。

「ところで、いつまでに家にいられるのかね」友栄さんの返しに口ごもっていると、ジシゴロ先生がついでのように言った。「あんたのは産休でも育児休暇でもないだろう？　ほんとの親の場合にしか適用されないはずだから」

「休んでいるわけじゃありませんよ。仕事は家でしています」

「そっか。宅業状態ってだけか。社内に託児所はないのかね？」

「そんな規模の会社じゃありませんよ。どこかに委託することを考えている筋は、あるみたいですけどね。」菱山は育児休暇を取得できないにもかかわらず、社主の梅沢さんをはじめ、職場の上司や同僚の理解かつ支援を得ており、育児しつつ仕事をし続けることができる。菱山が電話、ファックスなどで職場と連絡を取りながら記事を書く、あるいははずなのベビーカーを押しながら取材に行く場面が少くない。即ち、『はずな』では堀江敏幸が「父親はどのような環境が整うと育児や子育てに参加できるのか」という問いに注目していると考えられる。

また、『はずな』における父親は「イクメン」のみならず、「シングルファザー」でもあり、その故に菱山の育児に関する悩みや不安がしばしば描かれている。シングルファザーが抱く悩みについては石井クンツが次のように述べている。

父子家庭が直面する困難として、強く自立する「男らしさ」の概念が父子家庭援助の壁となっていることを春日（一九八九）は指摘している。つまり、男であるならば、困った時でも誰かに相談せずに自分で問題を解決しなければならぬという意識が強いために、結果、シングルファザーたちは孤立している傾向にあるという

ことだ。<sup>17)</sup>

菱山はママ友と情報交換ができず、病気患いの親にも頼ることができない。とはいえ、男らしさの概念に捕われず、しばしば周りにいる人に相談し、彼らのサポートがなすなの子育てにおいて重要な役割を果たしている。菱山となすなが住んでいるマンシヨンの近所に《美津保》という「昼間は喫茶店で夜は酒も出すバー」という店がある。《美津保》のママ瑞穂さん、その常連客の小児科医のジンゴロ先生（佐野甚五郎）、その娘友栄さんと妻千紗子さんなどがなすなの面倒を見るなり、菱山にアドバイスをするなりして常に菱山の育児を支援している。これらの人物については菱山が次のように述べている。

親とはいったいなんなのか、とあらためて思った。いまのなすなにとって父親と言えるのは、どんなに情けなくても本来は伯父さんであるこの私であり、祖父母と言えは彦端の親たちではなく、むしろ佐野家のふたりだ。もし許されればの話だが、母親役は友栄さんに振り当ててもいい。《美津保》のママも、黄倉さんもいる。なすなの周辺にいる人たちが即席の家族になって、本来あるべき家族の代役を果たしていた。（中略）じつところ、なすなに熱がないとわかってからのこの居間での会話は、しばらく味わったことのない括弧付きの「家庭」なるものを私に思い出させた。佐野家の三人は、本物の家族である。しかし残りの大小ふたりは彼らの親族でもなんでもないし、親と子でもない。それなのに、いっしょにいて言葉を交わしているあいだ、なんの違和感もなかった。

以上のように『なすな』では地域コミュニティが子育てにおいて相談相手となっており、「核家族」を越えた「家庭」が描かれている。また、家族の多様性も表象されており、現代日本社会の変更が反映されているといえよう。未婚・事実婚の親から成る家庭、父子・母子家庭、ステップファミリーなど、日本における「家庭」が変わりつつ

あり、血縁関係や性別役割分業観などによって規定された「近代家族」の定義を超えた、多様な家族像が現れている。『なすな』はこの新たな家族像、また、それにおいて期待されている新たな父親像を描いていると結論づけられるであろう。

### まとめ

菱山は「期間限定の父親」「臨時のお父様」「似非父親」という表現を使いながら、なすなが自分の娘ではないことをしばしば主張している。ドラマや漫画でしばしば描かれているイクメンと同様に、一時的な父親である菱山は現実のイクメンの大多数とは状況が異なると言わざるを得ない<sup>18</sup>。それにもかかわらず、『なすな』は新たな父親像を提示しているといえよう。本作品では四〇〇頁以上に渡り食事、おむつ替え、お風呂など「身のまわりの世話」をする父親を描く場面が相次いでいる。また、育児の苦痛のみならず、育児の楽しい側面も強調されており、「イクメン」、つまり「育児を楽しめる格好い男」のイメージを反映しているといえよう。さらに、『なすな』はイクメンを主人公に保育を語る小説だけではなく、現代社会における重要な問いに注目している。即ち、「育児や子育てに参加するという父親の願望を叶えるためにどのような環境を整える必要があるのか」という問いである。石井クンツが「ポシティブ心理学」という研究分野からヒントを得て、父親は「なぜ育児や子育てをしないのか」ではなく、「どのような環境や意識があれば育児・子育てにかかわることができるのか」というアプローチを提示している<sup>19</sup>。『なすな』においてもこのようなアプローチが見られるといえよう。つまり、社主の梅沢さんをはじめ、菱山の職場は育児を支援する環境である故に彼が育児休暇を取得できないにもかかわらず育児・子育てをすることができる。また、シングルファザーである菱山は「男らしさ」の概念に捕われず、周りの人に頼り、地域コミュニティも血縁

関係を越えた「家族」となり、なずなの子育てをサポートしているのである。このように父親を描いている『なずな』については内田と高橋が日本文学における「父の不在」の一例であること、「普通の父親の姿」が登場しないことを主張している。しかし、現代日本において「普通の父親」はどのような父親だろうか。現代日本社会において父親役割に関する考え方が多様であり、もはや大黒柱的な存在の父親ではなく、家事や育児を優先する「イクメン」が期待されている。『なずな』ではまさにこのような新たな父親像が描かれているといえよう。男らしさの概念に捕われず、赤子の世話を楽しむ父親を描く『なずな』は、「父の不在」ではなく、父性の変更を告げていると結論づけられるであろう。

【注】

- ①対談 内田樹、高橋源一郎、二〇一三年、「父親の不在」を文学は告げている、〔GQ Japan〕[http://gqjapan.jp/column/column/tatsuru-uchida\\_20130122/uchidatatakashi](http://gqjapan.jp/column/column/tatsuru-uchida_20130122/uchidatatakashi)、二〇一五年一〇月二〇日アクセス。
- ②内田樹『街場の共同体論』(潮出版社、二〇一四年)。
- ③集英社の文庫本の帯で『なずな』は「かけがえのない日々とかけがえのない人々を描く待望の長編『保育』小説」として紹介されている。堀江敏幸『なずな』(集英社、二〇一一年)を参照。
- ④高橋源一郎、前掲書。
- ⑤千田有紀『近代家族』(勁草書房、二〇一一年)。
- ⑥落合恵美子『近代家族の曲がり角』(角川叢書、二〇〇〇年)。
- ⑦冬木春子『父親の育児ストレス』大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児、女の育児——家族社会学からのアプローチ』(昭和堂、二〇〇八年)。
- ⑧林道義『父性の復権』(中央公論新社、一九九六年)。
- ⑨石井クンツ昌子『育メン』現象の社会学——育児・子育て参加への希望を叶えるために』(ミネルヴァ書房、二〇一三年)。
- ⑩育時連(男も女も育児時間を!)は、一九八〇年六月に発足した父親の育児などに注目した歴史の長い団体の一つである。出版物、シンポジウム、カンペーンの開催など、幅広く活躍している。石井クンツ昌子『育メン』現象の社会学——育児・子育て参加への希望を叶えるために』(前掲書)を参照。
- ⑪同上。

⑫冬木春子、前揚書。

⑬石井クンツ昌子、前揚書。

⑭大和礼子が整理しているように、親役割の基本的な要素として、「生活費を稼ぐこと」「しつけや教育」「一緒に遊ぶなどの交流」「身の回りの世話」の四つが挙げられる。「育児」の広義では、「稼ぐこと」を除き、上記の三つが「育児」の定義を成している。大和礼子「世話／しつけ／遊ぶ。父と。母親だけてない自分」を求める母・大和礼子・斧出節子・木脇奈智子編『男の育児、女の育児―家族社会学からのアプローチ』、前揚書。

⑮「イクメンクラブ三カ条」としては、第一に、「育児を楽しめるカッコいい男」であること、第二に「子どもたちを広く多様な世界へ誘います」こと、第三に、「妻への愛と心づかいも忘れない」こと、三つの条件が挙げられている。「イクメンクラブ」のHPを参照（二〇一五年一〇月三〇日アクセス）。

⑯「Fathering Japan」のHPを参照（二〇一五年一〇月三〇日アクセス）。

⑰石井クンツ昌子、前揚書。

⑱石井クンツが指摘しているように、イクメンを売りにした映画やテレビドラマでは祖父の隠し子を育てている男性（『うさぎドロップ』）や妻を亡くした父親など、現実のイクメンとは状況が違う。しかし、格好の良い俳優陣を主演にすることによって、イクメンのポジティブなイメージを助長している。

石井クンツ昌子『「育メン」現象の社会学―育児・子育て参加への希望を叶えるために』（前揚書）を参照。

⑲同上。

#### \* 討論要旨

中川成美氏は、『なすな』が情緒的なつながりに基づく近代家族のあり方を無批判に踏襲している点で問題があるのではないかと指摘した。発表者は、『なすな』は従来の父親の役割を越えた新たな父親像を提示するものであるが、家族間の愛情や母性愛を強調する箇所が目につくという点では、全く新しい家族のモデルを提示する作品とはなっていない、と認めた。

宗像和重氏は、新たな家族像を提示する現代文学は『なすな』の他にも数多く挙げることができるが、それらの作品と『なすな』の違いはどのようなところにあるのか、と質問した。発表者は、母娘関係を主題とする現代文学は非常に多いが、『なすな』は父親に焦点を当てている点、および「イクメン」という新たな父親像を提示しているところに特色がある、と回答した。

宗像氏はまた、明治文学の最も大きな主題のひとつは「父親との葛藤」であるが、現代文学では逆に父親の存在の希薄さが問題になっていると指摘して、歴史的な背景を踏まえた研究への可能性を示唆した。